

戦前団地を中心に ドイツ・オランダを巡って(ドイツ編)

KS
DIP 関西大学
戦略的研究基盤
団地再編
リーフレット
Re-DANCHI leaflet-

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業
『集合住宅“団地”の再編(再生・更新)手法に関する技術開発研究』

MAY 2012
VOL.032



マルガレーテンヘーエ (エッセン) 1)

ドイツやオランダでは19世紀以降の都市への人口集中に対して、20世紀初頭にそれらの人口を収容する手段として集合住宅団地という形式が非常に発達した。また、第二次世界大戦後にも集合住宅団地は大量に建設されたが、これらの戦後の団地と比較して戦前団地では、荒廃して再生あるいは再編の必要性に迫られる、という事態の発生が極めて少ない。そもそも都市における集住に関する永い伝統と経験を積み重ねた社会であっても、初期に「団地」と言う計画的集住市街地形式の街を開発するにあたって、団地生活を生き活きたものにするために、様々な工夫をする努力が行われた様に見受けられる。そしてその結果が、再生を余り必要としない原因の一部を成しているのではないかと推察ができる。それら戦前団地の視察を通じて、空間的特徴を探り、戦後の団地と比較することにより、団地再編に資すると考うる以下の様な特徴を見出すことが出来た。

・中低層建築により構成された空間が、人が持つ身体的尺度と大きくかけ離れていないものである。また、それを目指して構成されている。

- ・配置的には、「囲い込み」、「アイストップ」、「街路の屈曲やドッグレッグ」等を駆使した空間の領域化が図られている。
- ・街区のコーナー部のデザインを、「壁面の突出」、「スカイラインの突出」等で特徴的なものにより、領域の明確化に繋がっている。
- ・領域化された空間が「言葉が交わせる」、あるいは「視線が行き届く」範囲であることにより、その場への住民の帰属意識が醸成されている。
- ・専用庭における作庭や増改築等によって、住民自身による団地環境への積極的な参画と個性の発揮が行われている。また、その場が用意されている。
- ・共用の屋外空間における住民のアクティビティー(買い物、遊び、祈り等々)を誘導する仕掛けが設けられている。
- ・上記の様な事が総合され、住民自身が当該団地に深い愛着を持っている。

以上の様な点に関し、視察団地の個々の状況を以下に紹介する。

フランクフルト

第一次世界大戦後に、市街地周辺に多くの団地がエルンスト・マイにより建設された。

○ハイマット団地：

マイ団地の一つ。1927～34年建設。フランツ・レックル設計のリードホフ団地の一部が本団地として実現した。

大通りに60°程の角度をなす長大棟が並行に並ぶが、大通りに面する端部の棟は高さが他より高く、鉄道線路のカーブに沿った棟との間に一つの領域をつくる(Fig.2)。同棟の足元には店舗が配置され、街に機能を提供している。鉄道に沿う棟と長大棟の接続部はトンネル状で、道路が通る。この道路に接する長大棟1階端部にも諸所に店舗が設けられ、人が出会う場となっている。長大棟相互の間は同棟にアクセスする道路、コモングリーンと専用庭で構成され、車は全てこの道路に縦列駐車している。駐車場が無いのも一つの選択肢だ。長大棟は3～4層で、1階は専用庭、中間階はサンルーム、最上階はバルコニーを持つ。各棟フラットだが、1棟だけ1～3Fのメゾネット棟があり、当初から異なる住戸形式が供給された様だ。コモングリーンは積極的に使われている訳ではないが、今後何かに利用する余地を残す。

○レーマーシュタット団地：

当団地はマイ主導の最初の団地で、1927～28年に建設された。

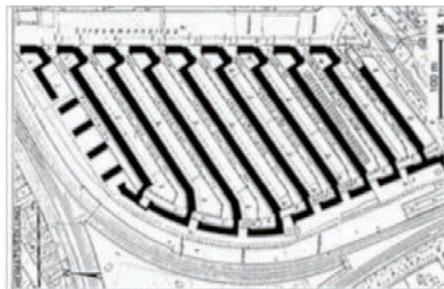


Fig.1 ハイマット団地配置図²⁾



Fig.2 長大棟の間の空間³⁾

ニダ川に向かう斜面に沿い数段の平行する段の上に、平行な2列の住棟がアプローチ道路を挟んで並ぶ。車は全てこの道路に縦列駐車している。住棟のアプローチ道路反対側は専用庭である。アプローチ道路から直接入る住戸は、道路際の壁から1m近い隙間を空けて玄関が設けられている。その対面住戸は数mの奥行きのコモンを挟み玄関に至る。玄関は2戸1対で配置され共同の底を持つ。2階建てテラスハウスのスケールと、アプローチ道路+コモンのスケール感が良い。円弧状の、あるいはらしを伴う棟配置はアイストップをつくり空間を領域化する。一方、専用庭側は相対する庭を挟んで小径がある。各専用庭は夫々に作庭され、住民の生活の一部となるが、空間は散漫な感がある(Fig.3)。一方、北の大通り沿いは4層フラットが建つ。

最も川に近い段では、住棟が適度な長さで切れ、切れた一方の住棟端部には3階建てのフラットが設けられている。その出入り口は住棟が切れた空地(=コモングリーン)に面しており、意図的に住棟の切れ目に意識が向くとともに、視界が開け川に向かって円弧状に張り出したテラスに導かれる。ここからは下段のクラインガルテンや遠くフランクフルト市内を一望できる。団地の中心ゾーンは各段を過る様に住棟が配され、各段の住棟がそこで止まる。Uバーンの駅から上には、円弧状の船を模したデザインの住棟があり1階には店舗が配されている。中央ゾーンの西には小学校があり、やはりそこが中心であることを示している。

○ブラウンハイム団地：

当団地もマイ団地の一つで1926～30年に建設された。ここでは西部部分を視た。テラスハウスが主体で、



Fig.3 レーマーシュタット配置図⁴⁾



Fig.4 アプローチ道路沿いの景観⁵⁾

それらが個別に増築されている。即ち外部空間に、住棟側から浸食をしており、その結果、外部空間に個性が生まれている。住民による外部空間の個性化である。この個性化は、個々の専用庭にも現れ、専用庭が活性化されている。当団地では個別の増築によって、均質だった団地空間が実に生き活きとしてきている。これは、住戸が居住者に譲渡された結果だとしか思えないが、団地再生の

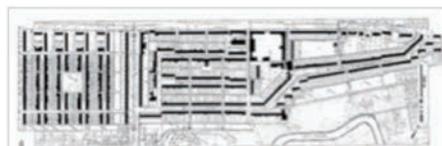


Fig.5 ブラウンハイム団地配置図⁶⁾



Fig.6 思い思いの増築や外壁の塗り替え⁷⁾

一つの方法でもあろう。ここも駐車場が無く、路上駐車である。

○ヴェストハウゼン団地：

当団地も同時期の団地の一つで1929～31年に建設された。当団地では、配置が全く規則化されている。中層フラットとテラスの混合団地で、中層は大通り沿いに通りに対して鉛直に配置されている。残りは2層のテラスハウスで、中層の奥に大通りと平行に配置されている(Fig.7)。平行に並ぶテラスの列に垂直に道路とコモングリーンが交互に延び、テラス棟へのアプローチ通路

はこれらを相互に繋いでいる。団地の南端には住民用のクラインガルテンが配されている。

テラス各棟へのアプローチ通路は住棟の片面にある。住棟間の空間は専用庭とアプローチ通路に使われ、専用庭は二つに分けられ、住棟に接する専用庭と、アプローチ通路を超えて使われる専用庭がある。アプローチ通路を挟み住棟の前面には先ず通路に接して物干し場が並ぶ。専用庭は、生垣で外からその様子を余り窺い知ることはできない。車は概ねはテラスに直行する道路に路上駐車されている。増築は許されていないらしく、個々の個性の表出はもっぱら外壁塗装や専用庭に限られる。外部空間に特徴を持たせるには、強力な使い方が必要になる。それぞれの場所で何かが起こるきっかけとなる仕掛けが必要だろう。例えばフットサルのコートなど、青少年の運動



Fig.7 ヴェストハウゼン団地配置図⁸⁾



Fig.8 ヴェストハウゼンのテラスハウス⁹⁾

系の使い方などがそれに当る。

エッセン

○アルテンホフ II :

クルップ製鉄は 19C 後半から 20C 初頭にかけて、多くの従業員住宅団地を建設した。アルフレッド・クルップの没後にその息子により、

父親の「従来のアパートメント形式から脱却し、退職者や病人も住めるゆったりした従業員住宅地を建設したい」という理想を実現するために、クルップ社の労働者住宅建設の第二フェースとしてアルテンホフ I が建設された。当団地はそのアルテンホフ I の拡大として、その東の谷を渡ったところに 1900 年頃に建設された。現在でも、ほぼ当初の状態が維持されている。

全体に田園都市的な考えで、土地の起伏を活かして配置計画がなされている。規模はそれほど大きくなく、こじんまりした良好な住宅地である。住棟は 2 戸 1 や 3 ~ 4 戸 1 が混在している。空間は、通りの屈曲やドッグレッグによって、アイストップを持ち、領域性を看取できる。従って、外部空間のまとまりが、2 階建て主体のスケール感と相まって、かなり優れている。住棟は個別で手を入れて外壁や玄関廻り、ロジア部分等が改修されている。しかし、一定の抑制が効いていて不自然さはない。



Fig.9 アルテンホフの街並み¹⁰⁾

○マルガレーテンヘーエ :

クルップ社の労働者住宅の集大成として 1910 ~ 38 年にかけて建設された。設計はゲオルク・メッツェンドルフ。一般市民も入居可能であった。100 年を経ているにも関わらず、素晴らしい。やはり、田園都市の考えが取り入れられ、道路の屈曲やドッグレッグが多用され、アイストップにより領域性が明確に感取できる。

大半が 2 階建てだが、一部に 3 ~ 4 階建ての規模の異なる住棟が混ざり密度感をもたらす。それがスケールアウトにならずバランスの良い空間

を構成している。概ね道路と宅地で構成されるが、広場囲み型配置では広場がコモン兼駐車場となっている。

ミルブルック谷を渡る橋の正面が団地全体のゲートになり、それをくぐるメインの通りには店舗も並ぶ。団地中心には食料品店やホテルと市の出る広場がある。通りに沿う住棟のセットバック距離を変化させたり、重要な交差点に面する 4 隅の建物は通りに対し 45° の角度をなす交差点の中心を向く壁を設け、場の重要性が強調されている。重要ではない交差点でも、建物遇部に八角形の部屋を配する等、コーナーを強調し、交差点であることを明示している。

ベルリン

○グロピウスシュタット :

グロピウスシュタットは、グロピウスが基本設計を行ったことでそう呼ばれている。しかし、西ベルリンが島状になったことにより高層高密度化が図られることになり、グロピウスはこれを善しとはしていなかった。建設は 1962 ~ 75 年までの年月を要した。

見た限りは低層・中層から高層まで取り混ぜて配置され、オープンスペースも十分なことから、むしろ、それ程高密度には見えない。緑道の周囲に学校や緑地が配置されているのはよいが、それらのオープンス



Fig.10 マルガレーテンヘーエ配置図¹¹⁾



Fig.11 マルガレーテンヘーエの街並み¹²⁾

ペースが、ただ広い場として存在するだけというのは残念である。

2002年から2009年にかけて「パイロットプロジェクト・グロピウスシュタット」と称し、団地内で芸術家によるパフォーマンスやインスタレーションが行われていた。オープンスペースも含め、その様な空間の活用法が模索されるべきだろう。それは青少年のスポーツでも、高齢者の健康づくりでもよい。北京や上海の様に、オープンスペースで太極拳や社交ダンスが行われるのも素敵だ。その様な活性化対策が必要だろう。

器物損壊こそは無いが落書きが至る所にあり、団地の状況がそれほど健全では無いことを物語っている。広いオープンスペースに不足機能を配置するのもよい。幼稚園や保育園はあるが、高齢者施設は不十分だろう。地区センターに店舗やその他のコミュニティ機能等が配置され、大規模ショッピングセンターも改修されていたが、コンビニやカフェあるいは高齢者施設が団地内に点在されているのもよい。また、青少年のエネルギーを発揮させる取り組みも必要である。落書きが落書きを呼ぶ。早期にクリーンアップすることが重要であろう。若者のボランティアを募って対処することも考えられるだろう。

○ハンザフィアテル：

築後50年以上経過しているが、手入れが良い。住民が誇りと愛着を持っており、また管理側が周到に管理しているからであろう。十分なオープンスペースは、ここでは「使われる」より、その「存在」が重要である様に思われる。居住者に会うことは稀だったが、若年層や若い親子連れも見かける。居住者のバラ



Fig.12 グロピウスシュタット当初計画案¹³⁾

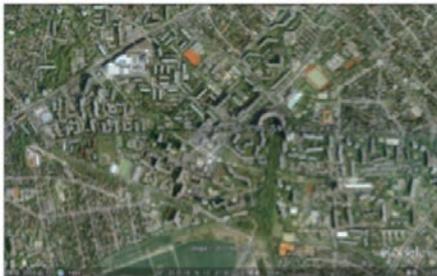


Fig.13 現グロピウスシュタットの航空写真¹⁴⁾



Fig.14 グロピウスシュタットの景観¹⁵⁾

ンスもそれほど崩れてはいないのかもしれない。もちろん落書きは、住棟に関してはほとんど目にするのがなかった。1957年の国際建築博覧会当時の配置計画等の経緯に鑑みると、必ずしも現在の配置が適切とは言えないような気がするが、それにもかかわらずあまり大きな問題を見ることが無いのは、どうしてなのか。1棟ずつ個性が際立つ建築により、均質な団地より空間がオープンスペースも含めて個性化されているからなのかもしれない。あるいは、建築家の卓抜な能力が、空間を使い切っているということも言える。例



Fig.15 オスカー・ニーマイヤー棟¹⁶⁾



Fig.16 ニーマイヤー棟のピロティー¹⁷⁾

えばオスカー・ニーマイヤー設計の住棟 (Fig.15) では1階がピロティーになっているが、階段やEVシャフトに到達するのに住民の全員がそのピロティーを通る必要があり、その部分が必然的に人の目に晒される様になっている (Fig.16)。

出典

1)3)5)7)9)10)12)15)16)17) 撮影：大坪明
2)4)6)8)11) http://www.tu-cottbus.de/theoriederarchitektur/Lehrstuhl/deu/lehre/SS03/siedlungen/siedl_deu.htm
13)Olfer Pferfer, "Die Gropiusstadt, Neuinterpretation von Großsiedlungen der 60er Jahre am Beispiel der Gropiusstadt in Berlin, opus.kobv.de, http://opus.kobv.de/zlb/volltexte/2013/19201/pdf/00_Pfeifer_Gropiusstadt_gross.pdf
14)Google Earth

発行：2012年5月

『戦前団地を中心にドイツ・オランダを巡って（ドイツ編）』

レクチャー：大坪 明（武庫川女子大学 教授）

執筆：大坪 明（ " ）

（講演：2012年4月27日）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

関西大学

先端科学技術推進機構 地域再生センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室

Tel : 06-6368-1111（内線:6720）

URL : <http://ksdp.jimdo.com/>